市内で最初に道路舗装がされた

北三条通

区内には、歴史を感じさせる通りが、いくつも残っています。そのひとつ「北三条通」を散歩し、今も残る建物や史跡を訪ねてみます。

秋も終わりに近づくと、北海道庁旧本庁舎（赤レンガ）正門から東側の北三条通のイチョウが色付いてきます。

北三条通が造られたのは、明治初頭のことでした。最初、この通りは開拓使により「札幌通」と名付けられていました。当時は道庁の場所に開拓使札幌本庁舎があり、ここから東に延びる通り沿いには札幌農学校や開拓使の官営工場など、さまざまな機関が集まっていました。また、明治十三年（一八八〇年）ころには、当時屯田事務局長（のちに第二代北海道庁長官）であった永山武四郎（ながやまたけしろう）の私邸も建てられました。現在も永山武四郎の私邸は残っており、一般に公開されています。

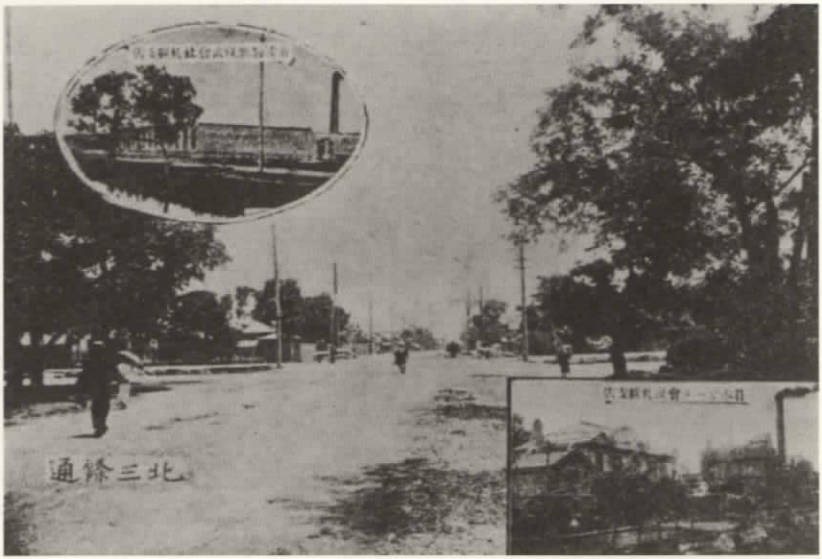
このように歴史を感じさせる北三条通は、市内で初めて舗装された道路です。北海道庁正門前から駅前通までの百十七・二七メートルの区間が、大正十三年（一九二四年）に舗装されました。車道部分にはブナ材で造られた木製のレンガが使われました。

両わきのイチョウが植えられたのは、通りが舗装された翌年の十四年（一九二五年）。歩道と車道の境界に三十二本が植えられました。現在も二十八本のイチョウが残っており、市民や観光客の目を楽しませています。

この木レンガ舗装は、札幌の気候に適していなかったのか、冬になると浮き上がるという欠点があったようで、昭和五年には上からアスファルトが施されました。その後も改良工事が行われ、現在は道庁に合わせたレンガが敷かれていますが、その舗装の下には木レンガが昔のままで残されています。

北三条西四丁目には「札幌舗装道路発祥の地」の碑が建っています。ブロンズの碑の両側をみかげ石でかたどった、高さ一メートルほどの碑ですが、上部には、当時使われた木レンガがはめ込まれているのを見ることができます。

現在も、創成川の東には石造りの倉庫や「さっぽ



明治時代の北３条通　（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

ろ・ふるさと文化百選」にも選ばれている旧札幌麦酒会社工場（サッポロファクトリー）、旧福山商店（福山ビル）などの古くからの建物が多く残されている北三条通。イチョウ並木が今もその歴史を見守っています。

（平成八年十一月号・第三十四回）